

## 消滅した集落

神田 一彦

(会員 津久見市日代)

津久見市の日代地区に赤崎という地区(世帯数六十戸)がある。この地区の中途から東の方向へ山を越し、海岸沿いに岬の先端へ行くと、そこに以前は三十戸程の「片鼻<sup>かたはな</sup>」という小集落があった。赤崎のちょうど反対側(裏側)にあたる所である。

平成二十八年現在、この地に家屋は一軒も残っていないし、勿論住人もいない。今では「片鼻」という寂しく侘しい地名だけが残っているのみである。

その昔、人が往き来していた道も今は荒廃して誰一人通る人もいない。このゆかりある地を尋ねてみたいと思ひ赤崎地区の何人かの人に道案内を頼んでみたが、「もう通れるような道はないだろう。」と言って、同行してくる人は誰もいなかった。



津久見市赤崎・片鼻

ある時、片鼻出身で赤崎に移住している人が居ると  
いう話を聞き、その人を捜し当てた事ができた。

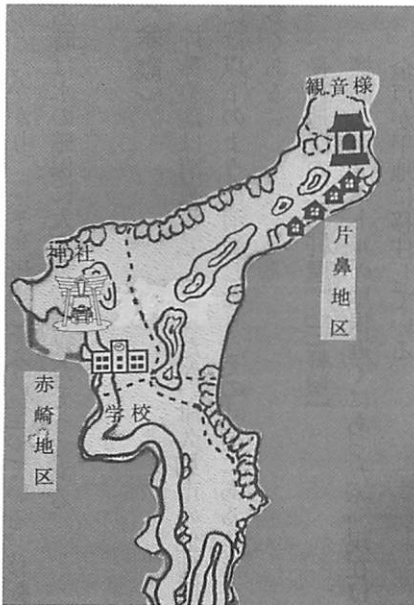
そして川野和生(昭和十年生)、川野キクエ(昭和十  
一年生)夫妻に会えた。早速二人から当時の片鼻の様  
子をいろいろ聞き出す事ができた。以下はその時の話  
の大意である。

言い伝えによると片鼻に人が住むようになったの  
は、昔、臼杵の神野こうのの人が船に乗ってやって来て「ど  
こか住めそうな所はなからうか」と、赤崎周辺を探し  
回っていた所、海岸近くに自生していた『暖竹だんちく』にサ  
ザエが沢山取り付いていたのを見て「ここなら海の物  
を採って住むことができるだろう。」と考えて定住し  
たのが、そもそもの始まりだそうである。それ以来、人  
が集まって来て片鼻の集落が形成されたという。

岬の中高の所に天神様を建立し、峠の上の広場で  
祭事を執りおこなっていた。地区内には地藏さんを始  
め、恵比須さん、稲荷さんも祀られていて、毎年、麦  
の穂が出る頃にお祭りが催されていた。地区内の五ヶ  
所に井戸が掘られていて、常時真水が出ていたので人  
が生活できたのであろう。渇水期でも底には水が溜ま

っていて潤れることはなかった。

人々は東西の急傾斜地を開墾して段々畑を作って  
芋と麦を育て、まわりの海で魚を採り半農半漁を生業  
としていた。当時はまだ、海の資源は豊富で、終戦後  
は、この小集落に二統にとうの網方がいて小鰯こいわし漁が盛んだっ  
た。一時は四浦一帯の漁業権を持っていた事があつた。  
また、赤崎の四浦側の斜面の畑に温州蜜柑うんしゅうみかんを栽培し  
ていて、朝日が早くからよく当たる好条件に恵まれ、  
甘くておいしい蜜柑みかんが出来ていた。



片鼻の先端北側に急峻な岩場があり、その直下に今でも灰石で作られた一体の小さな観音様が立っている。

日代・四浦・保戸島の人達は、この岬の事をずっと昔から観音崎という愛称をつけて敬愛してきている。

ここは潮の流れが激しくて、サザエ・鮑等が多く、海底にはいろいろな「はえ」(暗礁)が多く魚影も濃く今でも好漁場である。

片鼻は、もともと土地が狭く港が作れないので、漁船を引き揚げるために波打ち際に「スベリ」という斜面を造り港がわりにしていた。

戦後、しばらくは四軒(川野・小手川・児玉・伊東)が住んでいた。戸数が減り人口が少なくなったため、天神様の維持が困難となり、神社も取り壊して残っていた太鼓は、四浦の鳩浦に移した。その後居残っていた人達も、次々に片鼻を離れて四浦地区の荒代や鳩浦、また西大分の「かんたん」や宮崎の方へ転出して行った。最後まで残っていたのは川野さん一家だけであった。

その川野家も昭和四十五年に、とうとう自宅を解体して、その古材を船で赤崎まで運び現地(赤崎の最初

のとっかかり)に家を再建して今に至っている。移転当時は水の確保に大変苦勞されたそうである。

### 〈余談〉

片鼻集落は消滅してしまったが、津久見市の他地区には以下のように消滅したり、その寸前にある集落が多くある。

#### 一、長目地区の「八軒屋」「三軒屋」

標高二百メートルの尾根近くにあったが、現在は全戸が平地に移住している。

#### 二、西ノ内地区の「願寺」

高地にあったが石灰石採掘のため、全戸が中田地区に集団で移転。

#### 三、八戸地区

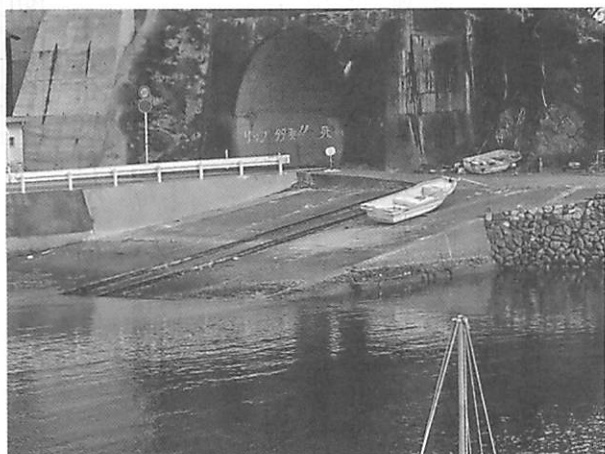
八戸高原の標高四百メートル付近に、大村・中村・与四郎という集落があったが、現在は大村

(四戸)中村(三戸)のみ。

#### 四、四浦半島の先端地区

間元(十一戸)・西泊(十戸)・松ヶ浦(三戸) 摺木(七戸)・狩床(十二戸)

津久見市に限らず、全国各地で大都市に人口が集中し、農山村・漁村・離島の集落が次々に衰退し、消滅しつつある。同時に日本人が古来から持っていた「豊かな心」もどんどん失われている。原因は何だろうか。これからどうして行けば良いだろうか。



船を引き揚げるためのスベリ (佐伯市晞干地区)



《コラム》  
この写真は、津久見四浦半島の先端の地区「間元」にある『水利明王』の石祠せきしです。後にはうばめの林があり、半島の先端の海岸にあります。目の前に保戸島があります。大潮の時の干潮時には、潮の中を島まで歩いて渡れるとか？そういう話も地元の人から聞きました。

間元の集落二十戸の内、一戸が神田姓で十九戸が柴田姓である。また隣の西泊は高木姓であった（歴史浪漫四号より）。

昨年秋この近くに出向いた所、地区の若い女性から海産物はいかがかと声をかけられた。（文責 吉田）